

CAMD 報告会

(Center for Development of Advanced Medicine for Dementia)

評価尺度 Update

— こう使えば結果を出せる！ —

在宅医療・自立支援開発部

近藤 和泉 部長

平成 23 年 7 月 14 日(木) 午後 4 時 00 分～

研究所 2 階会議室

人間の知能、QOL、意欲およびADLなどは、検査機器で検査することができず、また画像化もダイレクトにはできないため、テストないし質問形式の尺度を使って評価されることが多い。日本リハビリテーション医学会では、リハ領域で臨床的に使われているこのような尺度をデータベース化しているが、2009年の時点でその数は2153にも達している。Health measurement scalesと総称されるこれらの尺度は、診断・分類、予後予測、経時的変化の検出などの目的別に作成され、信頼性・妥当性が検証されなければならないとされている。しかし当初設定された用途が厳密に守られるべきであるにも関わらず、援用ないし誤用も多く、それが原因となって使用者が期待する成果が得られないことがしばしばある。今回のCAMD報告会では、適正な結果を出すための評価尺度の用途別の使用原則を示すとともに、Functional Skillsの概念やRasch分析を応用して当部で開発を行っている新しい評価尺度をご紹介させていただくことにしたい。